忙中閑話　モノとココロは両輪

「衣食足りて、礼節を知らず」

人間は、生まれてから死ぬまでに、概ね、「家庭生活」「学校生活」「職業生活」を経験し、そして日々、その基礎的な社会生活を営んでいる。

今、「3つの生活」が崩壊しつつあり、また、社会生活の至るところにおいて、「間違った個人主義」「勝手主義」の横行、「公徳心、モラル」の著しい劣化が散見される。

戦後一貫して、欧米に追いつくことを目標に、先人達が懸命に働き、ようやく、世界的な経済大国になった。これはこれで喜ばしい。

しかし、本当に「幸福感」が高まっているかどうか。むしろ、豊かになるに従い、「幸福感」よりも、「何とも言えない不安感」の方が増大しているのではないでしょうか。

経済発展とは裏腹に、精神的な頽廃、荒廃が進み、人間関係が希薄になり、社会的な絆も緩くなっている。

「衣食足りて、礼節を知らず」…お互いの心が乾いた社会になっているのではないでしょうか。

経済発展の源…モノとココロは両輪

近代の資本主義の発展は、「宗教的倫理観に基づいて、奉仕精神で、自己を律し、勤勉に、正直に、真面目に、節約的に働いた結果としての富（利益）を認めたところ」に源がある。

江戸時代の商人も、「商いは菩薩の業」「ご先祖様大切」と信仰心にあふれ、「商い」の前に、自己の内面を磨き、人格の陶冶に努めるべく、古典を学んだ。

経済（モノ）の発展の基礎には、精神（ココロ）が大きなエネルギーになっているのです。

「我々は、常に自らの内面に生ずる『虚ろなもの』によって、自らを破滅させているのであり、他者によって破滅させられているのではない」（トインビー）

「歴史の必然というべきか、国家が滅びる時は、必ず精神的活力の衰えが見られる。偉大な国家を滅ぼすのは、決して外的な要因ではない。それは何よりも、人間の心の中、そして、その反映たる社会の風潮によって滅びるのである」（ジョバンニ・ボテロ）

「あらゆる衰亡史に共通する結論は、国力や制度の欠陥によって起こるのではなく、常に、国民の精神的堕落と破綻によって起こる」（中西　輝政）

「衰退の原因として、いろいろあるが、結局、最後は、人間の精神に行き着く。そして、その精神の荒廃と、価値観の混乱は、まさに『繁栄そのもの』によって起こってくる」

「一つの国や企業の盛衰は、人間の精神にかかっている。倫理観といえば大げさだが、『自分は何かに奉仕する』という精神が大切である」

今、日本は、経済的にも、精神的にも衰退に向かっているのでしょうか。

政治も企業も、「経済の復興」に多くの目が向けられていますが、これだけでいいのでしょうか。

戦後の経済的復興を支えたのは、しっかりと息づき、根づいていた「武士道精神」「和、仁の精神」「義の精神」「勤勉・実直」等、日本人の伝統的精神ではないでしょうか。

「精神の復興の伴わない経済復興」は、砂上の楼閣に等しい。

「精神の復興」の鍵は教育の再興にある。かつての「忌まわしい道徳教育（?）」ではなく、物事の道理や、正しい生き方を学び、「人間を作ること」にある。

そして企業は、企業としての精神力を充実強化して、「気概」を示し、物心両面の復興に貢献すべきです。

PROFILE
テクノ経営総合研究所　TECコンサルタント
上田　勝　うえだ　まさる
松下電器出身、営業本部および本社経営監査部等を経て、松下流通研修所、販売研修所　取締役所長を歴任
NPO兵庫経営塾　副理事長